SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

地域と大学が共創する学びとコミュニティ

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学地域創造教育センター 公開日: 2024-04-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 阿部, 耕也 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/0002000526

講座2

地域と大学が共創する学びとコミュニティ

阿部　耕也

はじめに

静岡大学では一九七八年（昭和五十三年）から公開講座を開いています。その中でいろいろな変化が起こっていて、地域住民の方々にさまざまな学びを提供したり、あるいは一緒に何かを創っていったりしています。二〇一六年（平成二十八年）には地域創造学環という新しい教育プログラムも誕生し、静岡大学の学生に対する教育の在り方も変わってきました。最近は地域と大学が共につくる学びやコミュニティづくりにもつながってきたのではないかと思いますので、そのことに関するお礼も含めてお話ししたいと思っています。

今までこうした話は公開講座ではなく、文部科学省や県、自治体向けの研修会という形で話すことが多かったのですが、特に東部にはリピーターが非常に多く、キャンパスのある静岡市と浜松市以外の地域では最も熱心な参加者が多いので、お礼を兼ねてこのような形で公開講座や講演会などいろいろな取り組みを進めています。

今日お話しする内容は、先ほど言ったように学生の教育の在り方も含めた大学の取り組みが中心ですけれども、地域の方々の働きかけで変わってきた部分があるので、公開講座だけでなく、これから皆さんがいろいろな形で関わっていただける取り組みを紹介しますので、興味がありましたらこちらにもぜひご参加ください。

大学開放の沿革

†公開講座

公開講座は、本学の六学部のうち四学部が静岡市にあるので、最初は静岡で行われました。しかし、浜松にも工学部を中心とした学部があるので、「浜松でもやってほしい」というありがたいお話をいただき、浜松でも行うようにな

りました。すると、キャンパスがある二会場だけでなく、県内各地から「キャンパスまで行けないので、こちらでも開いてくれ」というお誘いをいただき、中でも一番早く開いたのが沼津会場でした。その後、清水、熱海、浜北などさまざまな所で行いましたが、継続的な会場としては東部が古くから開かれていたことになります。

東部で行うようになったのは一九八二年からです。講座数は今よりかなり多く、今は十五～十六ほどの講座を開いていますが、昔は一つのキャンパスで十人ほどの教員が長めに一講座を開いていました。カルチャーセンターがあるわけでもなく、他大学でもあまり講座を開いていなかったので、結構集まってくださいました（表1）。

ですから、公開講座の歴史はざっと四十五年ぐらいあります。沼津から三島に会場が移ったこともありましたが、東部というくくりでは四十年ほど継続しています。実際は一年休んだこともありましたが、そのときは沼津のリピーターの方に非常に怒られました。今まで最も継続的に受講していただいているのは東部会場の方で、二十八年連続という方がいらっしゃいました。沼津・三島などの東部はキャンパスはありませんが、向学心が高い地域だと思っています。

戦後すぐに庶民大学三島教室という、全国的にも非常に注目された取り組みがありましたし、社会教育研修所の支局もありました。また放送大学は、学習センターが各県に一つあって、大体は県庁所在地か交通の便が最も良い都市に置かれるのですが、静岡県は三島にあります。東西に長い静岡県の中でも東端に学習センターがあるのは、社会教

表1　静岡大学公開講座受講者数（昭和53年度～平成10年度）

	静岡会場			浜松会場			沼津会場			清水会場			熱海会場		
	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女
昭和53年	192	96	96												
昭和54年	198	83	115	96	64	32									
昭和55年	124	55	69	76	39	37									
昭和56年	149	85	64	91	70	21									
昭和57年	124	59	65	58	41	17	64	40	24						
昭和58年	69	44	25	105	39	66	118	45	73						
昭和59年	85	36	49	47	26	21	87	74	13						
昭和60年	93	36	57	57	51	6	103	39	64						
昭和61年	100	21	79	120	31	89	125	51	74						
昭和62年	158	22	136	126	27	99	120	67	53						
昭和63年	163	36	127	112	31	81	100	41	59						
平成1年	125	30	95	82	26	56	120	31	89	133	25	108			
平成2年	95	69	56	69	33	36	120	37	83	93	28	65			
平成3年	98	39	59	97	49	48	131	39	92	108	40	68			
平成4年	122	71	51	93	58	35	77	22	55	56	18	38			
平成5年	81	54	27	49	41	8	76	33	43	68	29	39			
平成6年	87	65	22	64	40	24	83	38	45	54	36	18			
平成7年	47	37	10	69	30	39	54	23	31	57	22	35	65	8	57
平成8年	47	36	11	61	39	22	47	18	29	46	17	29	47	10	37
平成9年	55	27	28	41	19	22	36	8	28	35	14	21	50	16	34
平成10年	40	19	21	41	20	21	55	18	37	50	14	36	62	15	47

育や生涯学習に対する理解や関心が高く、実際に受講される方も多いという理由があるのではないかと思っています。

われわれ地域創造教育センターがとりまとめを行う公開講座が十五〜十六ぐらい、読売新聞や中日新聞との共催も含めると二十を超える講座があります。内容的に非常に充実したものをブックレットという形で毎年一冊の冊子にしています。今までに十三冊発刊しましたが、そのうち四冊は東部会場の冊子です。「ふじのくにのホモ・サピエンス」というブックレットは、山岡拓也先生が明治大学の池谷信之先生と三回にわたって話された内容で、とても面白かったです。すぐ近くにある遺跡を掘ってみたら三万数千年前の地層から神津島産の黒曜石が出土したという、にわかには信じられないような話で、当時から航海術があったのかと非常に驚いたのですが、そうした東部にちなんだ講座を毎年企画しています。最近はジオパークの話なども冊子になっています。

†市民開放授業

キャンパスでは学生たちが普通に学んでいますが、公開講座というのは大学の教育・研究機能、社会連携の機能を学生以外にも開放したいということで、いわゆる大学開放の事業に位置づけられます。と同時に、それを通じて地域の方とのいろいろな連携を深めていくことも目的としてあります。また、一回限りではなく、できれば大学と受講者・OBの間に継続的な関係が生まれ、講座以外のことに発展したらいいなという狙いも含んでいます。それから、多種多様な講座をぜひとも提供したいのですが、いろいろなテーマを考え過ぎると、実際に開いてみたら参加者があまり多くないというケースもあります。

一方で、地域の方々から、「公開講座もありがたいのだが、学生たちが受けている授業に直接参加したい」という要望もあり、それが市民開放授業という形になりました(図1)。この中にも参加された方がいらっしゃるかもしれません。もし参加されていない方は、そういう取り組みもあるということをぜひご承知いただければと思います。ちな

図1　2019年度前学期市民開放授業受講者募集チラシ

みに、十年ほど前には小田原から参加した方、豊橋から参加した方もおり、受講者は県内だけではありません。

二〇〇〇年ごろから市民の方々からそうしたリクエストがあったのですが、学内で提案すると、「授業は、入試を受けて授業料を払って入ってくる学生向けのものなので、試験などの手続きを通さずに入るのは駄目だ」と言われました。そこで、徳島大学では本学より早く開講していたので、徳島大学がまとめた「公開授業のメリット」の表を使って大学執行部に説明したところ、四年ぐらいかけてようやく始めることができました。

講座を始めた当初、ＳＢＳテレビの情報番組で取り上げていただいたときの映像があるので、ご覧ください。

―動画開始―

（男性）新鮮です。

（女性）気持ちが若返ります。

（男性）楽しいですよ。

（レポーター）今、大学に通う年配の方が増えています。新入生と待ち合わせをしているんですけど、なかなか来ないです。まだかなあ。この人ではないですよね。

（塩澤）いやいや、新入生です。

（レポーター）えっ、新入生？

（塩澤）新入生の塩澤です。

（ナレーター）今年から静岡大学に通うことになった塩澤吉隆さん。今日は延べ三日目の大学です。ドキドキされていました。

（塩澤）もう四十年ぐらい前の学生ですから、様変わりですね。

（レポーター）そうですね。お味はいかがですか。

（塩澤）ああ、おいしい。月・火は授業がありますので、水・木ぐらいで宿題をやらないと、金曜日の夜、飲みに行けない。

（ナレーター）受講証を見せてもらいました。塩澤さんは英語を中心に三科目を受講しています。新入生となった気持ちは？

（塩澤）精神が高ぶるし、門を入った途端に何か崇高な気分になりますから、いいですね。

（ナレーター）塩澤さん、大いに刺激を受けているようです。でも実は、誰でもこうして気軽に大学生気分を味わえるんです。それが静岡大学の新しい試み「市民開放授業」です。自分の受けたい授業を選択し、入学試験なしに学生と一緒に学べます。その狙いとは？

（柴垣）もっと気楽に市民の方に、それこそ大学にどんど

ん入っていただいて、自分の知識を増やしていただけたらと思います。売りにしているのは、受講料十三科目・八千二百円で、自分の好きな科目を選べることです。

（ナレーター）何と受講料も格安。一般の授業を開放しているので、公開講座と違ってより多くの科目から選べるのが特徴です。現在七十九人の方が受講しています。受講生は学食のほか、売店や図書館を使うこともできるんです。塩澤さんの英語の教科書にはすごい書き込みが。

（レポーター）見てください、これ。いっぱい書き込んである。

（塩澤）単語を引く数が多過ぎてなかなか前に進まないです。

（レポーター）ちょっと英語で自己紹介など。

（塩澤）I am now sixty-one years old. Now also I living on my pension.

（レポーター）ありがとうございます。肌もつやつやされていますね。

（塩澤）いやあ。

―動画終了―

†市民開放授業の企画・実施

市民開放授業を開くに当たって、学内のコンセンサスづくりが一番難しかったです。市民に広報してどのぐらいの方が来てくださるかというのも心配な要素ではありましたが、むしろ一番大きな壁は、学内で強硬に反対する人がいたことです。もちろん全科目は開放できないので一部を開放し、学生が受けている授業に市民の方々が入ります。全教員にそれを認めさせるのはなかなか難しいので、「うちの授業には入ってもらって構いません」という自由意志で開放しました。

できるだけ低負担で授業を開放しました。実はそれ以前も科目等履修生や聴講生の制度があって、入試などしなくても入れたのです。ただ、入学検定料と入学金だけで二万～三万円になってしまい、授業料を合わせると半期十五回ほどの授業を受けるのに六万～七万円かかってしまいます。それでは壁が高くなってしまいますので、受講料を八千二百円に設定しました。今は回数も増えて、九千円台に少し値上げしています。ただ、今までの仕組みと比べるとだいぶアクセスしやすくなってきたと思います。

市民向けにも教員向けにも、市民開放授業にはどんな意義があるのか、何に注意しなければならないかということを伝えなければならないので、最初は説明会を開きました。

学生たちは必修・選択という形で受講しますが、市民の方々はシラバスを見て受講する科目を決めてから教室に入るため、自分には合わなかったということがあると思うので、試聴期間を設けることにしました。学生向けのシラバスとは別に専用のシラバスも発行しています。今の学生たちはシラバスをインターネットからダウンロードしているので、実は紙のシラバスは市民向けのものだけです。

先ほど紹介したようにSBSでも取り上げられたので、面白いことに今まで強硬に反対していた人たちがマスコミの取材を受けると、「前からやりたいと思っていた」などと言うのです。「ちょっと待て」と思いましたが、その人たちにすれば「やってみたら心配することはなかった」ということなのかもしれません。ですから、学内で反対する人はほぼいなくなって、非常にありがたかったです。

われわれが始める前にも全国で七つぐらいの大学が始めていたのですが、本学には一年目から割と意欲的な取り組みがありました。他大学に聞いてみても、「そういうのはやっていない」という取り組みがあるので、これを紹介します。小二田誠二先生の取り組みです。

―動画開始―

・お菓子作りの授業「全国に発信。静岡の名物お菓子を開発する」。

（ナレーター）人文学部（当時。現在は人文社会科学部）の授業にお邪魔しました。にぎやかでした。しかも学生より一般の方が多いようなのです。一体どんな授業なんでしょうか。

（男性）日本中の皆さんに受け入られるようなお菓子をぜひ作りたいです。

（ナレーター）おや？　授業で作るお菓子が全国区で受け入れられるものって一体どういうことなのでしょうか。お菓子を含めて全国に発信していこうというクリエイティブな授業なんです。

（レポーター）市民開放講座、こちらですかね。

（ナレーター）静岡の文化の再発見を狙いとした人文学部言語文化学科の授業です。小二田先生を中心に、学生と市民がグループになって活動していきます。その中身とは？

・名所案内作りの授業

（ナレーター）静岡の巨木や史跡を調べ、ガイドブックを作る。実はこの授業、静岡の名物・名所案内を作ろうというもの、静岡の文化や歴史を全国に発信するために学びます。十代の学生と八十代の市民までが一緒になって半年間

活動します。現地調査や取材を経て九月ごろ、形になる予定です。

（小二田）実際に学生と社会人が共同作業をしながら作っていこうとしています。今は世代間だけではなくて、コミュニケーションが内輪だけで出来上がっていると思うのです。お互いに刺激し合える環境を作りたい。

―動画終了―

教員が一方的にいろいろ話して、学生たちと一緒だけどやりとりがないというのではなくて、グループワーク、ゼミのような形の授業をしています。そういうものが何科目か入っていて、他大学にはないような授業の形も出てきています。こうした授業はだんだん増えていったのですが、残念ながらコロナになって途切れました。今は特殊な事情があって、オンラインが一コマでも入っていると市民の方に参加いただけないという決まりがあるため、開放科目数は激減しているのですが、これは何とかしたいと思います。また以前のようにいろいろな取り組みを市民開放授業でできるといいなと思っています。

†大学の授業に市民が参加することの意義

社会人受講生の方々と学生が協働・交流できるような授業もあって、とても素晴らしいと思います。「静岡の文化」というのは、先ほどの小二田先生の授業です。平野雅彦先生の「情報意匠論」というのもゼミ形式で、とても面白い授業になっています。市民と学生が大学の授業の中で地域活性化や地域づくりを目指し、新しいコミュニティを作っていくという方向性の授業が生まれています。逆に、授業の枠から外に出ていくような「天晴れ門前塾」や「アッパレ会」といった取り組みも、何年か前はありました。

他にも、これまでの公開講座とは若干趣を変えたものを企画しています。二〇〇一年から始まったのが、出前講座です。地域の方が企画してくださって、会場を用意して、広報してくださって、大学側は無料で講師を派遣し、旅費も大学で負担するというものです。出前講座はたくさんあると思いますが、地域の方が企画するのはちょっと珍しいと思います。われわれはこれを「しずだい飛ぶ教室」という名前で開いています。

東部では伊豆長岡町（現在は伊豆の国市）で、今は熊本大学に戻られた今村直樹先生の「幕末維新期の地域リーダーと伊豆」というテーマの出前講座がありました。これは公民館の方が企画してくださったもので、地域の方にと

ても人気があり、受講者もかなり多かったです。われわれは伊豆長岡になかなか行けませんし、今回のように公開講座を開くのは難しい地域だったので、出前講座の形で行いました。

それから、人文学部の重近啓樹先生が吉田町で開いた「三国志の世界」という授業もありました。吉田町も東海道線からは随分南側なので、バスで行くことが多い地域です。できればキャンパスに近い東部の三島・沼津だけでなく、県内津々浦々を訪問したいということで、こうした講座を開いています。何か企画があって、このテーマでこんなことをすれば人を集められるということがあれば、ご相談ください。これまでもいろいろな地域で開催してきて、今は合併して別の名前になっているような市町村からも結構お呼びがかかっていました。

市民開放授業も「しずだい飛ぶ教室」も、どちらも地域住民からの働きかけで実現した新しい大学開放の仕組みです。こうした取り組みには、われわれ大学開放事業を企画する側にもさまざまな学びがありました。

大学―地域連携・協働の諸事例

†棚田再生プロジェクト「清沢塾」

公開講座をきっかけに地域と大学との連携の取り組みが始まった事例もあります。

今までわれわれが実施した公開講座的なものの中で、恐らく最も人気があり、受講者が多かったのは、「静岡大学開学五十周年記念講座」、正確には静岡大学と静岡放送・

図2　創立50周年を記念した学外との共同企画による地域連携講座の記録（左：前期、右：後期、1998-1999）

静岡新聞社との記念講座でした（図2）。二十一世紀を迎える直前まで十八回にわたって毎月、三百五十～四百人ほどの受講者を集めて開かれました。

その中にはさまざまな授業がありましたが、「地球は世界人口を支えられるのか」という講座があって、肥料や農薬をまかない自然農を勧めるという座談会形式のものがありました。このときはとても多くの質問があって、反対意見も結構ありました。ですから、活気はあるけれども不思議な雰囲気だと思っていたら、質問者の方は肥料会社の関係者でした。それは仕方がないとは思うのですが、そういう激論があったときに受講者の一人から、「普通の水田でやろうと思ってもOKする人はあまりいないから、放置棚田でやってみたらいいのではないか」というアドバイスをいただきました。それで、講座の主催者である中井弘和先生が棚田を探して、実際に無農薬・無肥料で放置棚田を再生した「清沢塾」の取り組みがあるので、ご紹介します。

―動画開始―

（キャスター）今夜は特集です。これまで土を耕さず農薬を使わない、いわゆる自然農法で米作りに挑戦しているグループの様子を紹介してきました。そして、いよいよ収穫の時を迎えました。去年失敗に終わったこの試み、今年はどうなったのでしょうか。

（ナレーター）季節はすっかり秋。県内でもあちらこちらの田んぼで稲を刈る姿が見受けられます。そんな中、静岡市清沢にある棚田でも収穫の時を迎えました。

（レポーター）今年はどうですか。

（中井）いいですよね。来年はもっと良くなると思いますけどね。

（ナレーター）緑色の稲穂は、雑草に負けずに田んぼ一面を覆っています。今年も無事収穫を迎えることができました。

（中井）今日の主な予定は、こことそこの稲刈りをやりたいと思います。稲刈りは、もう最後の喜びですから。いや、食べるのが最後の喜びですね。

（女性）何というか、落穂拾いではないですけど、何拾いというんでしょう。

（男性）やっぱり喜ばしいねえ。ザクッザクッという鎌の音がするのがいいですね。

（ナレーター）雑草をかき分けながらの作業ですが、グループ全員喜びもひとしおです。というのも、グループがこの棚田で自然農法に取り組んだのは去年に引き続き二度目。いわば今年はリベンジの年だったのです。

去年は対策らしい対策をせず、共生させるはずの雑草に負けてしまったり、せっかく育った稲をイノシシに食べられてしまったのです。去年の教訓を生かし、まずグループが力を注いだのは水の管理。棚田という地形からか、去年は水が漏れてしまったため、全体に水を行き渡らせるために畔を作ったりと手を尽くしました。また田んぼの周りをワイヤーで囲み、電流を流すことでイノシシを寄せ付けない作戦に出ました。

これらの対策が功を奏し、無事稲刈りを迎えた日は地元の農家の方たちも応援に駆け付けました。

（男性）肥料をやったり消毒をやったりした者から見ると、何かびっくりするというか、これでもできるんだなというような。みんな感心して農家の人は帰りましたよ。

（レポーター）今年ずっと参加されていたんですけど、やっとここまで来て。

（男性）そうですね。去年は全然取れなかったので、今年はこれだけ実って感謝しています。また来年もっともっと取れるように、冬場から頑張らないとと思っています。

（中井）やっぱり自然をなめたらいかんということですかね。例えば最初は草と稲を共生させるということで、結構放ったらかしにしましたよね。やはりそれはいけないですよね。人間が手を貸せるところはできるだけ手を貸してあげるということはすごく重要だと感じましたね（図3）。

（ナレーター）去年の教訓を胸にメンバーたちは対策を講じ、やっと収穫にこぎ着けることができました。土を耕さず、農薬もまかないという現在の農業とは程遠い方法、そして棚田という難しい地形で稲を育てるのは容易なことではありません。リベンジに懸けた今年は、農家の苦労が身に染みた一年でもありました。

―動画終了―

現場を見ていると、元々の始まりが公開講座だったことが全然信じられないような雰囲気ですが、本当にさまざまな方々が集まっていました。当センター三代目センター長の滝先生や学

図3　棚田の草取り

図4　作業後の休憩の様子

長、前学長もいらして、みんな野良仕事の格好をしているので分かりにくいですけれども、本当にさまざまな立場の人が参加しています（図4）。

田んぼを貸してくれた人は当初、「うちには七枚ぐらい棚田があるから好きに使っていいよ」と言っていたのですが、雑草を全部取ってみたら二十五〜二十六枚ありました。実は、放置棚田を貸してくれた人も棚田が何枚か分からなかったという訳です。

学生たちは農学部の学生が主ですが、そこで卒論や修論を書いたりしています。十三〜十四品種の稲を植えていて、こういう環境のときにはどの稲がいいかということを検証しています。普通の水田は貸してくれませんし、大学の水田もなかなか難しいので、こういったところでボランティアの方々や地域の方々と一緒に取り組んでいます。

子どもたちにも非常に人気です。農薬や肥料をまかないので水がきれいになって、しかもある程度手入れをしているので、いろいろな生き物がいます。ゲンジボタルもヘイケボタルも復活し、シーズンを少しずらしながら光っていて、とてもきれいでした。こうしたものを小中学生が夏休みの宿題に活用しているという副次効果もありました。

「清沢塾」では、公開講座から地域や学生を巻き込んだ継続的な学びの場が生まれました。多種多様なサポーターやパートナーがいて、地域住民もボランティアも多く参加していました。それから地元の小学校・養護学校・幼稚園がそれぞれ自分たちの名前を付けた田んぼを借り、稲作体験をしていました。行政や教育委員会もサポートしていましたし、私たちは県から委託されて「ユースカレッジ」という青少年育成リーダー事業を行っていたのですが、その会場にもさせてもらいました。また、社会教育主事講習を四年に一度実施しているのですが、そのプログラムにも一日入れました。そんな形でさまざまなものが生まれています。

この棚田にはいろいろな活用の仕方があって、大学ではいろいろな種類の稲など教育・研究資源を持っていますし、地域の方はそもそも棚田を貸してくれるだけでなく、いろいろな実践の場や知恵を提供してくれています。テレビでは「一年目はイノシシに食べられた」という話をしていましたが、二年目はイモチ病が出て結構大変でした。無肥料・無農薬の自然農法が大原則なので、イモチ病で全滅しそうになったときに困って地域の方に相談すると、「農薬ができるまでは昔の人は竹酢液や木酢液を薄めてかけていた。今もそれが効くかどうか分からないし、それも農薬ではないかと言われそうだけど試してみる？」と言われ、中井先生が実際に試してみたら、きれいにイモチ病が治りました。

それで二年目は何とか収量を確保できたのです。実践の場を提供してもらっただけでなく、地元の知恵が功を奏したわけです。

そして、学生たちが研究課題を持って参加し、ボランティアとしても参加しています。市民への投げかけによって、創立五十周年の受講者なども参加しています。

環境保全の関係では、この場所自体は随分山奥に見えるのですが、清沢は静岡駅から車で四十分ほどで行ける場所にあり、棚田まで行くには細い道を一・五キロほど入る場所です。つまり、割と町中から近くて、しかも誰も行かないような道に入るので、廃棄物の捨て場所になってしまうのです。周辺にはテレビや冷蔵庫などが捨てられるので、清沢塾の参加者の方々は、田植えをした帰りに軽トラの後ろにテレビや冷蔵庫を積んでごみ処理センターに持っていきます。すると、いつもここでごみを捨てていた人たちも捨てなくなります。棚田を中心とした清沢塾の取り組みが始まることで、副産物として地域の環境保全にもつながっています。

また、棚田は必ず石垣のような石組みをして造っていくのですが、石の組み方にはそれぞれ流儀があるようです。城の研究をしていた教育委員会の方が、「これは掛川辺りの積み方に近い」という話をしていて、どうも昔は掛川方面から農民が移ってきたようなのです。

清沢塾のある清沢村辺りはほぼ全面が茶畑になっていますが、孫を連れて来ていたおじいちゃんは、「子の世代も孫の世代も、この辺は昔から茶畑をやっていると思っているけど、私たちが若い頃は棚田だった。清沢の原風景は茶畑ではなく棚田なのだ」と話していました。清沢の地域文化やアイデンティティが、茶畑であると同時に棚田でもあったということを孫に伝えたくて見に来たとおっしゃっていました。つまり、清沢という地域のアイデンティティを確認する場にもなっているのです。そういう意味で大学も入っていろいろやっていると、最初は遠巻きにして見ていた地域の方も、地域の歴史を確認することにつながったので、後の方はとてもスムーズに進みました。

†地域連携と教育の両立

先ほどユースカレッジや社会教育主事講習など人材育成の話もしましたが、その点では大学と地域が共に創る学び、どちらか一方が学ぶのではなく、お互いに学び合う取り組みになっていると思います。これも新しい学びの形、コミュニティづくりの形ではないかと思います。

そう考えると、大学がキャンパス内で学生相手に教育・研究をするだけでなく、地域に出かけていろいろな交流

をしたり、成果を発表したり、あるいは学んだりするのは非常に重要だと思います。大学は地域にとっての貴重なまちづくり資源であり、学生も含めた大学の資源がまちづくりにつながるようになれば素晴らしいですし、地域も大学にとって非常に重要な教育・研究の資源になり得ます（図5）。そうした相互資源化を進めるためには、大学開放や地域との連携をもっと進めなければなりません。地域は学生や教員が学ぶためのもう一つのキャンパスではないかと思います。

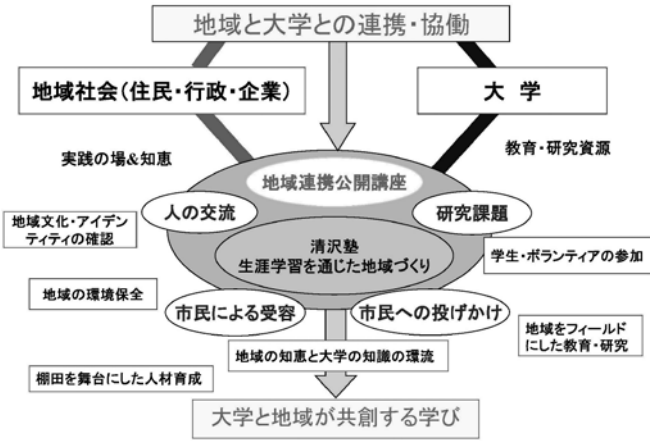

図5　地域連携と教育の両立

†大学と地域の連携によるまちづくり調査

そこで、地域の側では学生や教職員を含む大学全体をどのような期待を持って眺めているのか、あるいは大学側は地域に対してどのような貢献をすることが大事だと考えているのかを調べてみたいと思いました。そのためには多くの自治体のネットワークと協力すれば調査が進みやすいということで、全国生涯学習市町村協議会の事務局（掛川市）とともに調査を行い、「生涯学習まちづくり」に興味関心のある全国の百六十市町村にアンケートを実施しました。

自治体が大学に期待していることの第一位は、非常に意外だったのですが、「学生の社会貢献活動（ボランティア活動等）を推進」でした。「大いに期待している」が六七％、「少し期待している」を合わせると九割を超えます。以下、「実践に役立つ専門的知識・技能を有する人材養成」「幅広い教養を身に付けた人材養成」「公開講座の充実」などが続きます。学生の社会貢献活動の推進が断トツだったので、そうした要素を取り込んだ地域連携を進める必要があります。

この項目が、大学側の地域貢献の重要度においてどのぐらいの位置にあるかというと、確かに上位に入っていますが、回答割合が全然違っていて、「非常に重要である」は三四％しかありません。数値が全然違うのは非常に意外で、大学と地域の連携を進めるときに、学生をどう巻き込むかということが非常に重要だと思わせてくれる結果となりま

した。

この調査は二〇〇四年に行われたのですが、一部の大学、自治体にだけ聞いたに過ぎません。私は文部科学省が全大学を対象に毎年行っている「開かれた大学づくりに関する調査」の有識者会議メンバーだったので、「地域社会に対する大学の貢献項目」の設問の中に「学生の社会貢献活動を推進すること」を追加してもらいました。すると、八六％が地域貢献として重視しているにもかかわらず、実際に取り組んでいるのは六三％と低かったのです（図6）。ここがポイントだと考え、その後いろいろな取り組みを始めました。

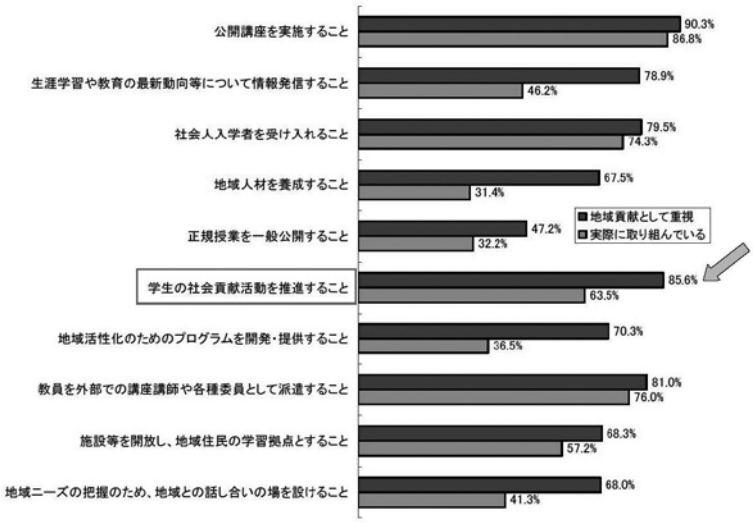

図6　地域社会に対する大学の貢献項目
（出典）文部科学省「開かれた大学づくりに関する調査」（2011年度）のデータから作成

地域連携応援プロジェクト

二〇一一（平成二十三）年からは、地域連携応援プロジェクトという事業を始めました（図7）。学生が主体となって教職員と共に地域との連携を深め、地域の課題を解決する取り組みです。これまでの応募件数は約二百十件、採択件数は約百五十件と、とても多くの取り組みが進んでいま

図7　平成23年度地域連携応援プロジェクト募集チラシ

す。もうすぐ今年度（二〇二三年度）の募集が行われ、採択結果が出るのはその一～二週間後ぐらいだと思います。これも学生にとっては非常に学びになりますし、さまざまな成果が出ています。

静岡市葵区の梅ヶ島という山間部の地域では、研究という感じではなく、むしろ実践が行われていて、水回りの改良工事をしたり、中学生にガイド本作りを教えたりしています。公開講座も教育研究の成果を生かすことになりますが、あまり公開講座をたくさん企画すると、教育研究の暇がなくなるかもしれません。しかし、地域連携応援プロジェクト的なものは、教育研究と社会連携の両方を進めるものだと思っています。

地域課題解決支援プロジェクト

学内の教員や学生に聞くのではなく、学外から課題を応募したらもっと社会連携が進むのではないかということで、地域課題解決支援プロジェクトを二〇一三年から始めました（図8）。十年目を迎え、今もいろいろな展開が進んでいます。

第一期は二十八件、第二期も十六件の応募が県内各地からありました。商店街の魅力発掘とデザイン、中山間地の活性化が課題として非常に多かったほか、空き家再生と利活用、防災と観光の融合といった課題もありました。最初は「あなたの地域の課題を教えてください」というふうに募集し、新聞記事にもしてもらいました。まったく応募がなかったら大学の存在意義がないことになると思って実はドキドキしていたのですが、四十件を超える課題を提案していただき、とてもありがたかったです。

図8　地域課題解決支援プロジェクトチラシ

当時、当センターはイノベーション社会連携推進機構にあったので、こうした成果を踏まえて産学連携と地域連携をさらに発展させるとともに、大学の知恵を必要とする地域や団体が潜在的にあるのだと感じ、プロジェクトの実施に踏み切りました。応募してくれた自治体の担当者は、「これまでは大学の力を借りたくてもパイプがなかったが、課

題解決支援プロジェクトを立ち上げてくれたことで、県内どこにいても依頼しやすくなった」と言っています。

地域からは棚田の保全などいろいろな課題が出たので、それらの地域課題をすべてデータベース化しています。あまり有名ではなくて、時々見に来る人がいる程度ですが、教員や学生が閲覧できるようにしています。地域から出てきた課題は非常に面白くて、大学が課題として掲げるのは研究ベースですけれども、地域が何十年も悩んでいる課題は特定の領域に偏ったものではなく、文系・理系どちらも関わりますし、工学部的な視点も人文的な視点も要ります。教育の要素も強く、それらがすべて合わさらなければ解決しないと思います。地域の課題は本当に複合的な要素が絡まっていて、自治体でも何年もかけて考えているのに解決策が出てこないから、われわれに相談があるわけです。

であれば、総合大学として持っているいろいろな学部を結び付けなければならないような課題を提案してもらえるのは、非常にありがたいことだと思いました。そのためには研究室が連携するだけでなく、学部の垣根を超えた履修科目なども作りたいと考えました。

学生が参画する地域貢献型教育プログラムへ

†地域創造学環の誕生

その後、私が考えていたのとはまったく別のルートから、地域創造学環が生まれました。地域創造学環とは、まさに地域の課題を取り上げ、発見し、解決を考えるプログラムなので、この学環に引き継がれる課題も多いです。現在、県内十五ほどの地域でフィールドワークを行っていますが、そのうち五つか六つは地域課題解決支援プロジェクトから引き継がれたものです。

ちなみに、松崎町だけで十一もの課題を出してもらいました。二十年ほど前、ある講習を受けた深澤準弥さんという方がプロジェクトに一生懸命応募してくれて、東伊豆町や南伊豆町にも声をかけてくれたからです。そうしたつながりもあって、いろいろな市民向けの講座を行うことも大事だと改めて思っています。深澤さんは当時、町の係長だったのですが、現在は町長を務めています。こんなふうに巡り巡って地域と大学の連携を手伝ってくれる人もいたのです。

地域創造学環は学内的な教育プログラムですけれども、結局は地域からの働きかけを受けて、形やカリキュラム、フィールドワーク地が決まってくるので、学内の教育・研

究の手法も地域の働きかけで大きく変わってくる可能性があるということをこのとき強く感じました。

当初、地域課題解決支援は、地域のニーズと大学の研究内容（シーズ）をマッチングすれば片付くのではないかと思っていたのですが、地域の課題にはさまざまな要素が絡んでおり、解決できるかどうかは別にして、継続的に入っていくことが大事だと思いましたし、それを歓迎してくれる雰囲気もあります。そういう意味で、フィールドワークをプログラムに入れたのは非常に良かったと思います。

†松崎町でのフィールドワーク

地域課題解決支援プロジェクトに提案のあった四十二課題すべてのヒアリングに行ってきました。県内を改めて回ってみて、本当にいろいろな所があることが分かって面白かったです。

例えば松崎町には石部の棚田があり、ドラマのロケ地にもなっていますし、ライトアップもされているようです。交通の便は非常に悪いのですが、とてもきれいで、最近は特に町に活力があると思います。他にも松崎町にはいろいろな資源があって、桜葉の生産は全国シェア七〇％を占め、日本一です。

人口六千人ほどの県内で最も小さな町ですけれども、実は帯広開拓の祖・依田勉三さんの出身地として有名で、特にコロナ禍前は帯広の小学生たちがアスパラガスなどの作物を持って依田家の墓を訪れ、帯広開拓に感謝するツアーを行っています。帯広市と松崎町は姉妹都市ですけれども、正確に言えば人口六千人の松崎町の方が親で、人口十三万人を超える帯広市が子どもという「親子」関係にあります。依田さんを主人公にした映画も作られています。

今でも十一月初めの秋祭りには「三番叟」という能が上演されるなど、本当にいろいろな文化・歴史資源があります。現在ここにもフィールドワークに入っています。

松崎高校の生徒たちと一緒に、松崎町にある「お宝」がある場所を地図に落とし込んだり、高校生たちの将来の夢を聞き取りするワークショップを開くなど、中高生にもアプローチしています。われわれ教員が行くより、大学生が入るといろいろなことを素直に話してくれますし、人間関係もスムーズに行きます。そういう意味では、中高生に大学生がアプローチすることも大事だと思っています。

†「二〇三〇松崎プロジェクト」

松崎町では今、フィールドワークだけでなく「二〇三〇松崎プロジェクト」という取り組みが進んでいます。松崎町から地域課題解決支援プロジェクトで十一件の課題を提

案してもらったとき、私は松崎町だけそんなにいろいろなことはできないと思っていたのですが、今は非常に多くの人が松崎町を気に入って、松崎町民以外の方々もやって来て、例えば映画を作ろうという動きになっています。

十年後の松崎を考えるワークショップが二〇二〇年から始まっており、静岡大学と連携して住民が積極的にいろいろな議論を進めています。未来社会デザイン機構の竹之内裕文先生を中心に、いろいろな学生や教員も入って、十年後の二〇三〇年に向けて町を活性化しようとしています。

そして、二〇三〇年に松崎をどんな町にしたいかという「二〇三〇松崎ゴール」をまとめました（表2）。「中毒性のある町」「ささる観光」など、大人が考えたらこんな表現にはならないのではないかというゴールを考えてくれました。ゴールごとに中高生や大人、町民以外の人も加わってチームを組み、具体策を検討しています。

表2　2030松崎ゴールs1.0最終案

1	松崎の自然・安らぎ・体験のオンリーワンが育ち、何度でも来たくなる「中毒性」のあるまちになっている。
2	「ささる」観光を多様な世代がプロデュースし、多様な発信とPRを展開している。
3	エコ・ツーリズムとサステナブル・ツーリズムが実現している。
4	地域の交通ネットワークと都市との相互アクセスが整備されている。
5	地域の資源・資産のユニークな価値が発見され、活用されている。
6	伝統の魅力が広く共有され、「祭り」などが継承されている。
7	農(のう)と漁(りょう)の活動が受け継がれ、食べ物が新鮮でおいしい。
8	地区・世代を超えた人間関係が守られている。
9	子育てをしやすいまちである。
10	多様な選択肢のなかから、やりがいのある仕事に就ける。
11	都会的な飲食・買い物も楽しめる。
12	高齢者になっても活躍できるまちである。
13	三余塾の伝統が受け継がれ、市民たちの学び合いの場がある。

＋2つのスタディグループ（防災、エネルギー[地域のインフラ]）

静岡新聞松崎支局の記者の方はコラムに、「松崎町が静岡大などと連携し、町民を交えた持続可能なまちづくりを進めている。昨年末から住民ワークショップを重ね、五月に十年後の町の理想像を示す十三のゴールが決まった」と書かれています。このゴールは完全に高校生が主導して作りました。なぜなら、われわれがいろいろ口出ししても、十年後は中高生が主力の世代として頑張らなければならないからです。「多くの知恵を結集させ、画期的なアイデアが飛び交う展開を目指したい」とも書かれています。

静大だけでなく松崎町観光協会や伊豆半島ジオガイド協会とも協定を結んでいますし、静岡ガスなどの企業も関わっています。『プロジェクトが町を動かすという意識で関わっている』。十三のゴールのうち、エコツーリズムの推進を目指すチームの一人、渡辺攻さん（七十九歳）は意欲を示す。古道を活用した散策コースの整備を検討中で、『町にはボトムアップの考え方で、住民の声を吸い上げてほしい』と期待する」とあります。実は今、町で一番長期で大きな計画である総合計画の策定にも大学などが関わっ

ています。

そんな形で新しいまちづくり、コミュニティづくりを行っています。しかも、いろいろな立場の人が参加していて、町長や専門家が町民に協力を求めるのではなく、高校生が目標を考えて、それを町長や町役場が実現しようとしています。どちらかが一方的に教えるのではなく、学び合い、教え合い、伝え合い、アイデアを出し合ってつくる環境ができつつあるのです。

「プロジェクトはこれからが正念場」というのは本当にそうです。「町は各チームからの提案を来年度策定の第六次総合計画に盛り込む方針を掲げる」ということです。「行政の奮闘に加え、町民一人一人の積極的な関りが求められている」、これは人口何十万の町では難しいのですが、逆に六千人ぐらいしか人口がいないから、フットワークがいいのかもしれません。学びから出発した取り組みであることがとても素晴らしいと思います。

「二〇三〇松崎プロジェクト」にはホームページがあります。中学や高校でワークショップを行った成果を、五百人ぐらいが入る大きなホールで発表しています。しかも講演会形式で行うだけでなく、幾つかのグループに分かれてワークショップも行っています。

†派生プログラム

こういう紹介をすると、割と元気な高齢者や若者、関係人口が盛り上げていて、ついていく人が大変ではないかと思われるのですが、関わっている人すべてが順風満帆という訳ではないし、意欲的な人だけではないのです。

いろいろな人が来ていて、例えば病気になってもう長くないので、昔関わりのあった松崎町で最期を迎えたいという人もいるし、都会に出ていったけど生活が合わなくて故郷に帰ってきて、でも仕事が見つからないという人もいます。都会で疲れ切って、休職して来る人もいます。そういう順風満帆でない人も受け入れたいし、そうした人が安心して休むことができ、しかも立ち上がる気力を育めるような場所にしたいということで、「風待ちカフェ」が始まっています。

各地で死生学カフェ等を運営している竹之内先生が、松崎でも住民や訪問者がいろいろ話し合える場所をつくりたい、ということで始まったワークショップ型のカフェです。松崎町の深澤さんから、伊豆の港町はすべて風待ち港であり、台風のときや風向きが悪いときに船が寄港して様子を見るのだという話を聞きました。人生にも、生涯学習や社会教育にも、同じようなことがあるのではないか。いつも元気でもっと学びたいわけはなくて、転職したい、退職後

の人生をどうするか、何に生きがいを持つかという悩みもあるかもしれません。そういうときに相談できるカフェをつくりたいという思いが、「風待ちカフェ」につながったのだと思います。

それから、人を船に例えると、みんなで相談したり話し合ったりするのもいいのですが、自分の壊れた帆を直したり、新しく造ったり、船体を補修したり、つまり新たな技能や知識を身に付けたり、スキルを高めたりする工房もあっていいのではないかということで、リカレント教育プログラムとして「風待ち工房（仮名）」というプログラムを企画中です。「ワークショップ」とは元々は「工房」という意味ですから、何かを作る、構築し直す、修理するようなリカレント教育プログラムができたらと考えています。これが出来上がったらまた皆さんに紹介します。座学がメインではなくて、伊豆半島のさまざまな場所でまちづくりの活動があるので、そこにいろいろな人が関わったり、実習として入ってもらえるようなプログラムになればと考えています。

地域貢献は大学の義務

全国七百六十一の国公私立大学を対象に、大学が地域社会にどのような貢献をしているかを調べた地域貢献度のランキングが発表されており、直近の二〇二一年は静大が十三位に入りました。実は回答の仕方によってだいぶ変わるので、貢献度が上位の大学が本当に貢献しているのかというのは不明なところはありますが、ある程度の評価をしてもらっています。

われわれは、地域貢献をすることは余裕があるときの追加の取り組みではなく、大学としての義務だと思っています。静大が開学するときに、県内の市町村から強制的に寄付金を徴収していたそうです。「静岡大学設立後援会寄付金目標額配分表」という記録が残っています。寄付というのは本来自主的に行うもので、目標額も配分表もないはずです。静大ができるときに、県内津々浦々の本当に人口数百人ぐらいしかいないような自治体にまで、「あなたの町の割り当てはこのぐらい」というふうに寄付を強制していたようです。

戦後すぐなので財政的に非常に厳しい時代であり、話を聞くと「自分たちの小学校の改修費用も出せないようなときに、大学をつくるために寄付金を出せと言われて強制的に取られた」と言う人もいます。このことは案外知られていません。われわれはそのことを思い起こす必要があると思います。

ですから、地域貢献度ランキングが十三位であることに喜んでいられません。静岡や浜松などキャンパスがある自治体だけでなく、県内津々浦々から寄付をもらっているのですから、少なくとも学生と一緒にヒアリングに行くようなことをしないと罰が当たると思っています。私が大学に来たのはちょうど五十周年のときで、この記録が発見されて非常に大きなショックを受けました。先ほどランキングを自慢げに出しましたが、地域貢献は達成しなければならない目標なのです。

公開講座のいろいろな新しい形を紹介しましたけれども、大学ができる前からずっとサポートをいただいているのですから、これからも何とか恩を返していきたいと思っています。今日は講座としてあまり皆さんに興味のある内容ではなかったかもしれませんが、そういったことをお伝えしたくて参りました。

質疑応答

質問――話を伺っていると、マスコミにも取り上げられていますし、非常に成功しているように思います。ここへたどり着くまでには苦労があったと思うのですが、人をどうやってうまく集めたのだろうと思いました。

というのも、私は去年（二〇二二年）から今年（二〇二三年）の頭にかけて、富士市の「ＦＵＪＩ未来塾」に参加しました。この未来塾は、富士市の課題をどうやって解決するかということを参加者で考えるもので、自分はテーマリーダーを務めたのですが、最終的には人を集められず、チームが実働する前に崩壊してしまったのです。そのとき感じたのは、どうやって同志を集めればいいのだろうということでした。最近はＳＮＳ等で声を掛ければ集まると簡単に言うのですが、集まらなくて、県庁でビラを配ったりしたのですが、それでも駄目でした。地域に対して何かやりたいと思ったときに、行動に移るまでの産みの苦しさを思い知ったのです。

先ほどの支援プロジェクトを知っていれば、提案を出していただろうと思っています。今回の松崎の取り組みも恐らくゼロからイチの部分が非常に大変だったと思うのですが、そのあたりをどう切り抜けたのでしょうか。

阿部――成功に見えるように話しているだけで、失敗もたくさんあります。文科省などの研修会で話すと、「たまたまいい人がいたのではないか」と言われるのですが、その通りです。松崎町のプロジェクトのことを自慢げに話しましたが、このプロジェクトが竹之内先生が中心となってうまく展開しているのはなぜかというと、先ほどお話しした

深澤さんを初めとして二十年来の付き合いがあって、お互いに何を言っても無理なものは無理、できることはできるという関係になっていたからです。

県内津々浦々から四十二の課題が寄せられたと言いましたが、うまく続いてフィードバックされているのは松崎町も含めて五つ程度であり、ヒアリングに何回か行ってもうまくいかなかったプロジェクトの方がずっと多いです。でも、全部をやろうと思ってもとても無理ですし、縁も運もあるので、松崎町では十年間かけて少しずつ大きくなってきたという感じです。運というのは本当にその通りで、逆に言えば運がないところは、何らかの背景があってうまくいかなかったのだと思います。

それから、学生が入ると途端に元気が出るのですが、学生が入るには秘訣があって、彼らは楽しくないと来ないし、何らかのメリットがないと来ません。課題を中心に置いて、課題のことだけをやると暗くなってしまいます。むしろ課題は最終的に何かうまくいけばいいので、課題に行く前に、その地域に入ってこんな面白いものがある、こんな発見があるという形で、あるもの探しから入った方がいいと思います。課題があるということは、足りないものがあるということで、ないものねだりをするとなかなか難しいのです。そういう意味では、「地元学」という考え方があって、その手法を取り入れたのはとても良かったと思います。

課題から出発すると、何をやっても重くなります。「まっとうに課題に取り組もうと思っているのだから、みんな一生懸命やるべきなのに、なぜいいかげんな奴がいるのか」と言っても、いいかげんなのは当たり前なのです。自分の課題ではないことが自分事になるためにはステップが必要なので、最初は楽しく「こんな発見があるのか」ということをきっかけにして、普通にやっていけば当然課題も見えてくるので、課題が最後に来るようにすればいいのではないかと思います。

また、相性もあると思います。相性が良くなければ諦めて、この人は信頼できる、この人は話せるというふうになれば付き合います。百来たら百全部対応しようと思わない方がいいと思います。私が紹介したのは、五十あったうちの二つか三つの話で、失敗談の方はあまり話していません。ヒントになったかどうか分かりませんが、そんな感じです。